

巻頭の辞

「症例報告のすすめ」

最近では証拠に基づく医療 (EBM) の時代となり、コアジャーナル (たとえば New England J of Medicine や Lancet) では大規模臨床研究、とりわけランダム化比較対照試験 (RCT) を代表とする介入研究やコホート研究を代表とする観察研究、といった分析的臨床研究の論文が主流となっている。確かに多人数の集団を対象に統計学的手法を用いて病因、病態、診断、治療、予後などを解析することによって導かれた質の高い研究成果は日常臨床では非常に有用な根拠となる。

一方このような臨床研究の基礎となっているのは個々の症例の積み重ねである。すなわち症例報告や症例シリーズ研究といった記述的研究が原点となっている。症例報告の論文はインパクトファクターが低くなるために最近ではほとんどのコアジャーナルで採択していない。しかし若い医師にとって症例報告をすることは非常に重要である。これには診断・治療に難渋した稀な疾患、従来の疾患単位に当てはまらない特異な病態、非定型的な臨床症状や異なる治療の反応性、あるいは興味ある複数の疾患の合併、など様々である。症例報告をまとめるためには関連文献を自ら調べ、簡潔にまとめて筋道をたてて結論を導き出す作業が必要である。症例を一例一例大切に、医学的に価値があると判断されるものは症例報告として研究会や学会で積極的に発表して徹底的に議論することも大切である。しかし単に発表するだけでは個人的経験で終了してしまう。症例報告を論文にすることも大切である。論文にまとめることで自身の科学的考察や論理的思考が養われ、また読者にも広く医学的知識が伝播され診療の現場に役立つことになる。

症例報告は患者指向型研究の原点ともいえ、新たな疾患の発見や病因の解明、新たな診断・治療法の開発への足がかりにもなる。それには臨床医としての観察力や科学者としての洞察力も必要となる。いずれにしても症例報告はN=1の臨床研究といえる。若い医師は自身が受け持った個々の症例を大切に、最初は症例報告に始まり、最後には分析的臨床研究へと進化・発展できれば国内でも質の高いEBMが構築できるのではないだろうか。

先端医療センター

病院長 平 田 結喜緒